

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月18日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530628

研究課題名（和文）精神障害当事者の語りの有効性に関する研究

研究課題名（英文）Effect of Mental Health Consumer's Narrative Story

研究代表者

栄 セツコ（SAKAE SETSUKO）

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：40319596

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、精神障害者が教育機関に出向き、精神疾患の好発時期にある中学生・高校生に病いの体験を語る活動の有効性を明らかにすることである。その結果、精神障害当事者の語りを聞いた中学生・高校生は共生社会の実現に対する意識の向上がみられ、精神障害当事者自身にも「アウトカムとしてのリカバリー」「エンパワメント（自分の内側から回復する力）の育成」「社会改革への意識の覚醒」などがみられた。このことから、中学生・高校生の精神保健福祉教育では、精神障害当事者の病いの語りを取り入れたプログラムが有効的といえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to measure the effectiveness of an educational activity in which mental health consumers visit educational organizations and share their experience of the disorders with junior and senior high school students, who are very likely to suffer the onset of mental illness. The change in the awareness of junior and senior high school students who have listened to the storytelling of mental health consumers is the realization of a society friendly to both people with and without mental illness. The awareness of self-change of the mental health consumers sharing their experience with the junior and senior high school students is a greater feeling of empowerment (internal healing power), recovery, and social improvement in their self-efficacy. The foregoing indicates that a program incorporating storytelling by mental health consumers is effective in mental health welfare education for junior and senior high school students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：精神障害当事者の語り、中学生・高校生 精神保健福祉教育、共生社会

1. 研究開始当初の背景

近年、精神保健福祉領域において、精神疾患に対する早期支援の有効性ととも、共生

社会の実現を掲げた理念の普及によって、精神疾患の好発時期にある中学生・高校生（以下、中高生）を対象とした精神保健福祉教育

の試行的実践がみられるようになってきた。
 本研究は、2006・07年度の大阪市就労支援等モデル委託事業である「教育現場における精神障害者の語りに関する事業」を基盤とし、事業終了後も活動の継続を希望する精神障害当事者により、語り部グループ「ぴあの」が結成された。

2007・08年度には、日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽研究）「精神障害当事者の語りの効用に関する研究」（代表：栄セツコ）が採択され、①中学生の意識変容と②精神障害当事者の語る行為の意義を明らかにすることを目的として、語り部の研修・教育機関における福祉教育の実践・活動の成果報告を柱として活動を強化してきた。①中学生の意識変容として、中学生719名を対象として自記式調査を行った結果、「自身のメンタルヘルスへの関心の向上」と「精神障害者に対する理解促進」があげられた。②精神障害当事者の語る行為の意義として、当事者自身が中学生に伝えたいこととして、「精神疾患は誰もが罹る病気であること」「精神病を患っても自分らしく生きていけることが可能であること」があげられ、精神疾患の予防よりも、共生社会の実現を伝えたいとしていた。また、語りを行った精神障害当事者自身にも、自己肯定感や自己効力感の向上および精神疾患観の肯定的変化がみられ、リカバリーを促進する結果となった。

このように、精神障害当事者の語りは聞き手と語り手の双方に一定の成果がみられたものの、聞き手である中高生の意識構造や当事者自身の語りによる自己変容の認識については未だ明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究は、精神障害当事者が教育機関に向き、精神疾患の好発時期にある中高生に病いの体験を語る活動が基盤にある（図1）。

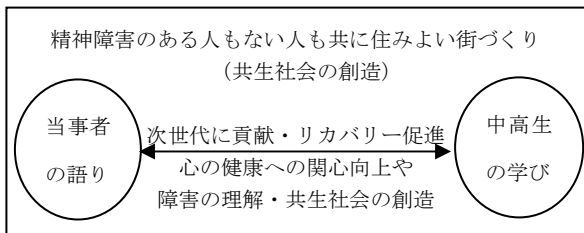


図1 精神障害当事者の語り部グループの活動

本研究の目的は、(1)聞き手の中高生の意識構造を明らかにすること、(2)当事者自身の語りの内容と、語る活動による自己変容の認識を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

研究の基盤となる精神保健福祉教育を行うにあたって、介入教育の先行研究から精神

保健福祉教育プログラム(案)を設定した(図2)。

精神保健福祉教育プログラム(案)
 当事者の語りと専門職による補助教材を用いた講義

図2 精神保健福祉教育プログラム(案)

初年度は専門職の講義で使用する補助教材を本活動の参画者である精神障害当事者と作成した。補助教材は「こころとくらしを考えよう」をタイトルとした学びのガイドであり、自分自身のメンタルヘルスへの向上と精神障害(者)の理解促進を目的として、Step1:知識の習得、Step2:自身のメンタルヘルスへの関心の向上、Step3:ストレス等への対処方法の獲得から構成されている。語りの作成段階で、語りを聞いた看護・福祉系の大学を目指す高校生(16名)の意見も取り入れて作成した(2009年度)。

(1)精神障害当事者による語りの聞き手である中学生・高校生の意識変容

精神障害当事者の語りを中心とした精神保健福祉教育を受講した中学生135名の受講後の感想文をもとに、意識変容に関して重要と判断した文章や単語を抽出し内容分析を行った(2010年6月)。

(2-1)当事者が中学生・高校生に語りで伝えたい内容

本テーマをもとに、語り部グループ「ぴあの」では、2009年度(5回)・2010年度(5回)、精神障害当事者9名でグループディスカッションを重ねてきた。その内容を録音した逐語録の内容から、重要と思われる語録(単語やセンテンス)をカードに書き留めた。それらのカードを同質性の高いコードにまとめ、KJ法を用いてカテゴリーリストに整理した(2010年11月)。

(2-2)語る活動による精神障害当事者の自己変容の認識

「語りの実践による自己変容」をテーマに自由に語ってもらった(2011年8月)。その後、録音した逐語録から自己変容に関する単語やセンテンスを抽出し、質的帰納分析を行った。加えて、3年間にわたる活動のなかのインフォーマルインタビューの内容やフィールドノートの記述内容も加えてコード化し、カテゴリー化を図った。

以上の調査を実施するにあたって、大阪市立大学生生活科学研究科研究倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

(1)精神障害当事者による語りの聞き手である中学生・高校生の意識変容

精神障害当事者の語りを主とした精神保健福祉教育を受講した中学生 135 人の感想文から意識変容に関連すると判断し、抽出した文章や単語は 133 だった。それを類似性の高いものに分類すると、4つのカテゴリーが産出され【知識の習得 (46)】が最も多く、【自身のメンタルヘルスへの関心 (42)】【共生社会の実現 (23)】【感情・意識 (20)】となった。以下、【 】カテゴリー、〈 〉サブカテゴリー、「 」引用文として、カテゴリー間の関連を示す。

精神障害当事者の語りと専門職による講義によって、中高生は〈精神障害者数の知識〉〈疾病や障害の知識〉〈障害特性に関する知識〉という精神障害に関する【知識の習得】がある。それにより、精神障害者に対する「かわいそう」「辛そう」などの〈同情〉や精神病に罹患することへの〈不安〉がみられた。一方、自分自身の精神障害者に対する偏見に気づいたという〈意識の変化〉があり、【感情・意識】レベルの感想がみられた。また、精神障害当事者の発病前から現在に至る過程を聞くことで〈自己に類似の体験〉の確認や早期における対処の必要性の認識および対処方法の確認といった〈自身のストレスマネジメント〉を確認し【自身のメンタルヘルスへの関心】がみられた。そして、精神障害の有無にかかわらず誰もが自分らしく生きることができる社会として、〈人としての尊重〉〈共生社会の実現〉〈共生社会の担い手の自分〉といった【共生社会の創造】に向けた意識が醸成されることが示唆された (図 3)。

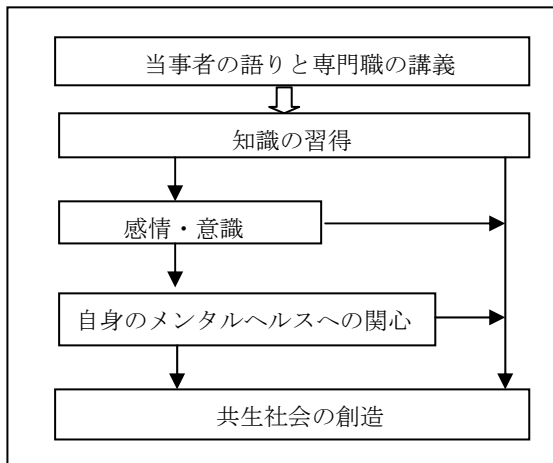


図 3 当事者の語りによる聞き手の意識構造

(2-1) 当事者が中学生・高校生に語りで伝えたい内容

精神障害当事者の語りから、4つのカテゴリーが抽出された。そのカテゴリーは、『語り部が抱く学生像』『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』『病いの体験からの学び』『共生社会の実現に向けた協働』だった。精神障害当事者は教育現場における語

りの実体験やマスメディアから『語り部が抱く学生像』を描き、その中学生に対して『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』と『病いの体験からの学び』までの病いの過程のなかで、『共生社会の実現に向けた協働』を伝えたいとしていた。

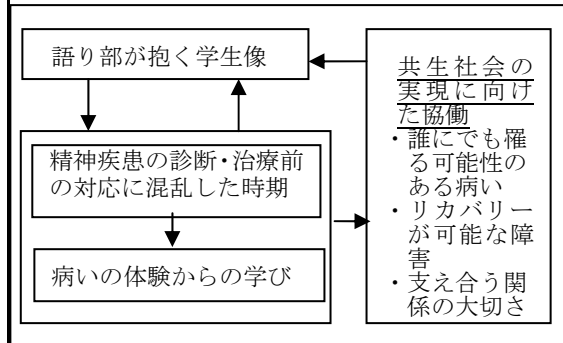


図 4 当事者が語りのなかで伝えたいこと

精神障害当事者は精神疾患の好発時期にあるという『語り部が抱く学生像』があり、【日常生活におけるストレスフルな体験】と【ストレスフルな環境】が重なり【精神の不調を体験】するが、「対処方法の欠如と内なる偏見」のために混乱を生じていた。この『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』を経て、【個人的な病的体験や生活のしづらさの体験】に加えて、【精神科特有の治療環境】のなかで不安感が高まるものの周囲の理解が得られないまま、認知された無力感や学習された孤立無援感の経験が加わりパワーレスな状態になっていた。パワーレスな状態にある精神障害当事者は、ありのままの自分を認めてくれる場や社会関係および機会を通して回復に向かうなかで、【病いの体験から得たもの】を認識していた。このような『精神疾患の診断・治療前の対応に混乱した時期』と『病いの体験からの学び』の経験をもとに、精神障害当事者は精神疾患の好発時期にある中学生に対して、精神病は【誰でもかかる可能性がある病気なので、自分のこととして考えてほしい】【病いになっても、自分らしく生きることが可能であることを知ってほしい】【病いをもっている自分らしく生きることができる関係性を形成してほしい】を特徴とする『共生社会の実現に向けた協働』を伝えたいことが明らかになった。

以上のように、精神障害当事者は精神疾患の好発時期にある中高生に共生社会の実現に向けた協働を願っており、精神病がありふれた病気であること、精神病を患ってもリカバリーが可能なこと、病いの有無にかかわらず相互尊重・相互支援の関係性が重要なこと、を伝えたいとしていた。このことは、当事者の語りは聞き手の中高生自身のメンタルヘルスへの関心を高めるとともに、一人ひとり

が共生社会の実現に向けて参画する意識を醸成し、相互理解に基づく人権意識の向上に寄与する可能性があるといえる（図4）。

(2-2) 精神障害当事者の語る活動による自己変容の認識

語り部活動による自己変容について、【個人的レベル】【対人関係的レベル】【環境的レベル】の категорияが抽出された（表1）。

表1 当事者の語る活動による自己変容

<p>・ <u>個人的レベル</u> 自信・ありのまままでよい・症状の波への対処方法の獲得・疾病に対する肯定観への変容・自己効力感の向上・生活に対する新たな気づき・未来志向、ベネフィットファインディングなど</p> <p>・ <u>対人関係的レベル</u> コミュニケーション能力の向上・孤独感の解消・仲間との出会いや交流の希望・セルフヘルプグループ結成への意欲の向上など</p> <p>・ <u>環境的レベル</u> 社会に対する批判的な観点・自身の語りを教育機関や地域で話す必要性・支え合いの社会など</p>
--

【個人的レベル】として、〈自分自身に対して自信がでてきた〉〈ありのままの自分でよい〉〈自分なりに病気とうまくつき合うコツがわかってきた〉〈自分が病気になったのはストレスの多い生活が続いたからと思う〉

〈自分の病気や障害の体験について前向きに（肯定的に）捉えられた〉〈自分の病気や障害の体験が人の役に立つ〉〈病気・障害・福祉・他の活動などについて学習したい〉〈今よりもっと広い範囲に外出してみようと思う〉〈今までの自分の生活や人生に対して新たな気づきがあった〉〈自分の将来に対して前向きに生きていこうと思う〉などがある。

【対人関係的レベル】では、〈自分の意見を他人に伝えることがうまくなった〉〈他の人と力をあわせることで、一人ではできないことができる〉〈仲間ができて孤独感がなくなった〉〈もっと多くの仲間と出たい・交流したい〉〈セルフヘルプグループを立ち上げてみようと思う〉などがみられた。

【環境的レベル】では、〈社会には、まだ精神障害（者）に対する偏見が強いと思う〉

〈小・中学校、高校、大学などの教育機関に語り部が出向いて、自己の体験を話す必要があると思う〉〈地域住民の人々に語り部が出向いて、自己の体験を話す必要があると思う〉〈精神障害の体験を生かしたさまざまな当事者活動について知りたいと思う〉〈地域にある社会資源をもっとうまく使おうと思う〉〈医師（主治医）に希望や困っていることを相談してみようと思う〉〈公的機関（保健所や福祉事務所など）の支援者に希望や困

っていることを相談してみようと思う〉〈社会福祉施設（ヒットの施設など）の支援者に希望や困っていることを相談してみようと思う〉などがあげられた。

このように、精神障害当事者の語りによる自己変容の認識は、個人的レベル、対人関係的レベル、環境的レベルにおいてみられ、それらはエンパワメントの過程と合致する要素といえる。精神障害当事者は語りの積み重ねのなかで、当事者のリカバリーの促進に寄与することが推察できる。

以上のことから、3カ年にわたる「精神障害当事者の『語り』の有効性に関する研究」は、自己の病いを語る精神障害当事者である語り手と、その語りの聞き手の双方に一定の有効性がみられたといえる。精神疾患の好発時期にある中学生・高校生は、精神障害当事者の病いの体験を聞くことで、自身のメンタルヘルスへの関心の向上、精神障害（者）への理解促進、共生社会の実現への行動化がみられた。一方、語り手は自己の病いを語ることでエンパワメントが図られ、リカバリーの促進に寄与することが示唆された。

精神疾患の早期支援の重要性が実証され、精神疾患の好発時期にある中学生・高校生は精神疾患に対する正しい知識を習得することが焦眉の課題となっている。2008年に改正された学習指導要領では、初等・中等教育の柱に「生きる力」が掲げられ、確かな学力、健康・体力、豊かな人間性を育むことが謳われている。さらに、2011年7月に、厚生労働省は精神疾患をがん、脳卒中、心臓病、糖尿病と並ぶ5大疾患に位置づけ重点施策を行うことが決定された。

このことから、今後、精神疾患の好発時期にある中学生・高校生が「生きる力」を育むことができる精神保健福祉教育のプログラムを開発する必要があるといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 栄セツコ、精神障害当事者の語りによる精神保健福祉教育、精神障害とリハビリテーション、依頼原稿、32号、2012（印刷中）。
- ② 栄セツコ、清水由香、精神障害当事者が語る「早期」に関する一考察、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、37巻第3号、2012、91-111。
- ③ 栄セツコ、清水由香、教職員の統合失調症に関するリテラシーに関する一考察、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、第35巻第2号、2010、1-13。
- ④ 山口創生、栄セツコ、芦田邦子他、精神障

害当事者の語りによる精神障害（者）に対する態度変容、精神障害とリハビリテーション、査読有、第14巻第1号、2010、69-74.

〔学会発表〕（計7件）

- ①松本すみ子・島津屋賢子、栄セツコ、メンタルヘルスと福祉教育、日本福祉教育・ボランティア学習学会（招待講演）、2011年12月3日、同志社大学（京都府）。
- ②栄セツコ、吉村夕里、黒岡和容他、精神障害者の学校教育への参画の有効性（自主シンポジウム）、日本精神障害者リハビリテーション学会、2011年11月13日、佛教大学（京都府）。
- ③栄セツコ、清水由香、学校教育における精神当事者の語りの有効性—当事者が中高生に伝えたいこと、日本社会福祉学会、2011年10月9日、淑徳大学（千葉県）。
- ④清水由香、栄セツコ、精神障害当事者による前駆期から受療に至るまでの語りの分析（2）、日本精神保健・予防学会、2010年12月11日、全国社会福祉協議会（東京都）。
- ⑤栄セツコ、清水由香、精神障害当事者による前駆期から受療に至るまでの語りの分析（1）、日本精神保健・予防学会、2010年12月11日、全国社会福祉協議会（東京都）。
- ⑥栄セツコ、語り部グループ「ぴあの」の活動から学ぶ、日本福祉教育・ボランティア学習学会（招待パネルディスカッション）、2010年11月27日、前橋市民会館（群馬県）。
- ⑦栄セツコ、清水由香、教職員の統合失調症に関するリテラシーの現状—A市教育委員会の研修参加者を対象として—、日本精神保健・予防学会、2009年11月29日、全国社会福祉協議会（東京都）。

〔報告書〕（計3件）

- ①栄セツコ編、精神障害当事者の「語り」の有効性に関する報告書（平成23年度成果報告書）、2012、60頁。
- ②栄セツコ編、精神障害当事者の「語り」の有効性に関する報告書（平成22年度成果報告書）、2011、72頁。
- ③栄セツコ編、精神障害当事者の「語り」の有効性に関する報告書（平成21年度成果報告書）、2010、64頁。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栄セツコ (SAKAE SETSUKO)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：40319596

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

清水由香 (SHIMIZU YUKA)

大阪市立大学・生活科学研究科・助教

研究者番号：90336793